SPECIAL MESSAGE
神戸百店会だより

★華麗な染色美術の最高峰
「琳派百図展」

社団法人日本伝統染色工芸保存協会と大丸前、みよしやの共催で、5月23、24、25日の3日間、神戸ポートピアホテル布引、北野、生田の間に於て「琳派百図展」が開かれる。〝琳派〟は桃山時代末から元禄期にかけ、日本のデザイン史に一つの頂点を築いた美術・工芸家たちの総称で、この派の完成者尾形光琳の一字をとって〝琳派〟と呼ばれた。洗練された装飾性と卓抜したデザイン感覚の作風を現代に再現し、後世に伝えたいという試みで優秀なる京都染色工芸家たちで精魂こめて創作された名品約300点が一堂に展示される。

□お問合せはみよしや☎321－3448まで。

盛況だった昨年の琳派百図展

★リザ・ソシアルクラブ
〝エスプリ〟カード

サインひとつで気軽にショッピングができる、リザ・ソシアルクラブ〝エスプリ〟のカードシステムは、お気に入りの洋服をみつけたとき、大きな買物をというとき、とても便利。

入会の手続きは簡単、20歳から60歳までの勤続年数2年（自営の方は5年）以上の方、電話による連絡がとれる方（女性が無職の場合、ご主人が上記の条件に該当していれば可）ならどなたでも。入会金3、500円、会費無料。申し込みは最寄のリザ・サロンへ。

またメンバーになると、素敵な記念品のプレゼントや、リゾート施設への優待など数々の特典もある。

□リザ・ソシアルクラブ事務局
〒650 神戸市中央区三宮町1丁目9番1－701号
☎078－391－6801（代）

★ブライトカラーで
さわやかな夏のオシャレ

ハイセンスな帽子でトアロードにファンタスティックな店舗を構えるマキシンが'82春夏物展示会を1Fと5F6Fを使って催した。

夏のお洒落は帽子で

1Fは高級素材を使ったオシャレっぽいタウン用の帽子やゴージャスなウエディングハット。印象的だったのは黒いフォーマル用の帽子が、豊富に揃えられていることでさすがマキシンならではと思わせた。

カジュアルやリゾート、スポーティ派はシンプルな中にもひとひねりしてセンスアップ。今年はさらに色彩が美しく、ソフトタッチで幅広い年齢層のファンからも評判が高かった。

★'82田崎真珠新作展示会
〝風〟をテーマに

田崎真珠の'82新作コレク

●ショップトピックス

★UCCカップシリーズレジャーポットプレゼント／UCCカップシリーズ製品の裏に貼ってある、品質表示シールを10枚集めて、店頭の応募ハガキの裏面に貼ってお送りください。ハガキ1枚（品質表示シール10枚）を1口とし、お1人様何口でもご応募できます。毎週1千名様（期間中合計1万7千名様）にUCCレジャーポットを1個差しあげます。期間は5月29日（土）まで（当日消印有効）。送り先／〒650－91神戸市中央郵便局私書箱1350号UCCレジャーポットプレゼント係（なお、期間中200枚集めれば全員にもれなくプレゼント、最寄のUCCカフェ・メルカード、UCCコーヒーバザールへ200枚まとめてご持参ください）

★恒例の'82ミキモト春の特別展示会が4月1、2日大阪ロイヤルホテル桐の間にて、4月3、4日ミキモト大阪店（梅田新阪急ビル）にて、今回は「彩りの詩人たち」と題して開催。チェーンの魔術師＝ウェーレンドルフ、ロンドンの人気作家＝ジェフリー・タークなど、海外からの新作も競を競い、さらにグラフィック・デザイナー永井一正氏のデザインによるジュエリーも出品されました。また飯田深雪、倫子さんの宝石をテーマにしたアートフラワーも同時に展示され好評でした。

★5月1日～9月30日の期間、神戸オリエンタルホテルB1セラパーにてビアフェスティバルを開催ローストビーフまたは伊勢エビのグリルのオードブル1品と生ビールジョッキ1杯で950円（PM5～PM9・30）

★6月1日～9月23日、ニューポートホテルでサマーウェディングを30名様（税サ込）で36万9千円

New Face

みつめる瞳が真剣

ションが3月9日～12日、オリエンタルホテルにて華やかに開催。今回のテーマは〝風――自分みつけた〟いつも新しい自分をみつけようとしている風のように自由な女性のためにデザインされたジュエリーたちが多数紹介された。藤井秀二、メリー重富、河野肇さんらのデザインコレクションの新作がひときわ美しく輝いていた。

★メイクアップコンテストで2つのビッグタイトル

化粧品メーカーのJMC（植村秀社長）が主催した'82メイクアップコンテストでエリザベス美容室の芦屋店に勤務する久保清美さんが見事ダイヤモンド賞に輝き、特別に婦人画報賞も受賞した。3月29日、大阪東宝ホテルで催されたこの大会には約80名が参加した。「これからの美容師は単にヘアーだけでなくメイクもできるのが本当のプロです」とオーナーの畑尾芙久子さんも喜びの表情

喜びの久保さん

★二つ茶屋新築オープン

お菓子も食事も楽しめる

元町1番街にある和菓子の老舗、二つ茶屋が3月30日（火）に新築オープン。1Fは和菓子づくり65年の伝統を持つおなじみの京菓子売場、アイスクリームの天ぷらや、くずぜんざい、あんみつなどユニークなメニューの茶寮。2Fは名物とんかつ、すきやき、しゃぶしゃぶなどが楽しめる大衆向きのお食事処。〝柚おめん〟という今までになかったまったく新しいメニューがおすすめ品。座敷もあるので各種宴会にも気軽に利用できる。店頭では奥田社長自ら考案のおこわ饅頭、栗おはぎの実演販売もしており全製品にアルカリ性イオン水を使っている。

（料理、飲物、ケーキ、案内状、挙式料などすべて含む）。またハネムーンナイトプレゼント（挙式当日の宿泊、夕朝食プレゼント）、婚礼貸衣裳、婚礼写真、着付料30%割引の特典もあります。お問合せは☎231―4171

新製品コーナー

●フルーツと花とお菓子の組み合わせ…

3月27日（土）国鉄本山駅山側に、デコレーションフルーツショップ「レスポワール」がオープン。みずみずしいフルーツと季節の花々とバラエティ豊かなお菓子の組み合わせ、お望みのスタイルでお望みの日時に届けてくれます。お気軽にお電話をどうぞ。☎(078) 451-3573　神戸市東灘区岡本1-3-31。愛らしい、まっかなイチゴに小花を添えて……、トロピカルフルーツと南国の花を情熱的にアレンジして……、太陽の光をいっぱいあびたオレンジを素朴なカゴに入れて可憐な花で飾って……etc. あなたならではの新しい贈り方を演出してください。

ポケット ジャーナル

★第6回国際ソロプチミストの賞を海野、小畑に

5月9日、東京のホテルニューオータニで、第6回国際ソロプチミストの日本リィジョン（ガバナー／吹田富実子）が開かれる。当日は、ソロプチミスト神戸（会長／鈴木慶子）の推薦するカナデアン歌舞伎の演出家海野光子さんが、第10回の千嘉代子賞（受賞者5人）を、国際的な活躍を評価されて受賞。また、第3回目を迎える婦人の地位向上賞を小畑延子さん（家庭養護促進協会、書家）が、自身も両手を腕より切断というハンディにもめげず、福祉活動や、芸術活動を持続し、婦人らしい活躍をしたと10人の人々と共に受賞した。「やっぱり助かります。2年続けて30万の副賞がつくというのは有難いわ。今まで、ラッキーだったので、これからは厳しく見つめて励みたい」と小畑延子さんの素朴な喜びの声を聞いた。

小畑延子さん

海野光子さん

★5月8日今藤長之・芳村伊十七、長唄コンサート

邦楽界のプリンス、長唄の今藤長之・芳村伊十七の第2回サロンコンサートが5月8日生田神社会館四階ホールで午後3時から開かれる。解説はコロンビアの邦楽ディレクター平井猛氏。プログラムは2曲。長唄「都風流」唄／今藤長之・尚之／弦／芳村伊十七・杵屋勝国「綱館」は長之の独吟で三味線は伊十七・勝国という意欲的な演奏だ。

芳村伊十七さん

今藤長之さん

チケット／2000円で一〇〇名限定というぜい沢さ。小さなサロンで生の名演奏の醍醐味をたっぷりと

主催は神戸邦楽銘撰会。事務局／月刊神戸っ子内078（331）2246小泉美喜子まで。後援は長之・伊十七長唄愛好会。

★北野に新しい名所

うろこ美術館がオープン

5月中旬、ユニークな異人館でおなじみの「うろこの家」の西隣の庭に美術館が誕生する。建物は鉄筋コンクリート三階建てで「うろこの家」と同様、うろこの形をした天然の石盤で壁を覆うという凝った外観。

うろこ美術館予想図

館主は神戸海事検定の荒川義雄社長。美術館の建設は、中国現代絵画の研究家として知られている同社長の長年の夢で、オープニング展には、中国現代作家による「中国巨匠展」が予定されている。同美術館は、日中友好美術画廊という性格をもつとともに、発表の場に恵まれない郷土の秀れた新進作家に無料で開放し、地元文化の発展に寄与

誕生日ありがとう運動

映画「小さな輪・大きな輪」無料貸出し　申込み続く

先号でお知らせしましたちえおくれの問題の啓発映画「小さな輪大きな輪」の無料貸出しの申込みが続いています。

この映画は、本運動が「ちえおくれに対する無関心から生じる誤解・偏見・差別をなくそう」と、願って制作した八ミリのカラー映画です。

今まで上映された会合や上映申込みは、次のとおりです。

本運動の京都友の会、滋賀友の会、兵庫県社会福祉協議会、神戸市福祉関係職員研修会、神戸市立白川台中学校生徒会、伊丹市立稲野小学校、大阪府和泉市手をつなぐ親の会、三重県名張市手をつなぐ会、大阪府高槻市手をつなぐ親の会、兵庫県明石市の親の有志、愛媛県松山市あゆみ学園父母の会滋賀県守山市公民館など、いろいろな会や個人からの申込みが続いています。

また、映画フィルムの実費頒布の申込みも、京都友の会と神戸市社会福祉協議会からきています。

わたしたち関係者は、予想を上まわる好評で、とても喜んでいます。

八ミリ映画で茶の間で手軽に上映でき、しかも、大ホールでも写せます。

みなさんも、各地で積極的に利用してください。

映画フィルムの問合せと申込みは、左記へおねがいいたします。

誕生日ありがとう運動本部

651 神戸市中央区御幸通八―一―六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電二五一―八一六一内線三一六

したいという構想をもっており、地元美術界にとっても、大きな朗報である。

★神戸と横浜が対決

インターポートマッチ

明治21年から毎年行なわれている神戸在住の外国人スポーツクラブKRACと横浜の外国人スポーツクラブYCACとのスポーツマッチ〝インターポートマッチ〟が3月に開催された。

ラグビーは3月6日横浜で対戦し、YCACの勝利。サッカーは3月13日、磯上グラウンドで対戦、3対0でKRACの勝利（1軍）。他に男女ホッケー、ダーツなどが神戸で行なわれた。13日夕方よりKRACクラブハウスに於てYCACメンバーたちを招いてのディナーパーティが開かれ、楽しい一刻を過ごした。

はるばる横浜から応援に

★盛りあがる「日本丸」

神戸誘致への市民運動

運輸省航海訓練所の大型帆船「日本丸」「海王丸」は、今から52年前に神戸で誕生した、4マストバーク型の兄弟帆船で、神戸港に寄港するたびに帆船ファンの熱い歓迎を受けている。ところが、いよいよその任務を終え第一線から退くことになったのだが、問題は〝余生〟をどこで送るかだ。早速、横浜をはじめ幾つかの都市が誘致の名乗りを上げた。もちろん神戸もだ。そこで4月19日に、帆船を神戸へ誘致するための委員会が設置され、官民一体となって誘致実現へ本格的な第一歩を踏み出した。

事務局／神戸港湾振興協会
☎391－6751

誘致が待たれる日本丸

★神戸に新しく

大型専門書店がオープン

3月20日、国鉄三ノ宮駅東側サンパル3Fにジュンク堂書店がオープンした。同書店は約300坪の売場面積を持ち、書籍は30万冊を収容できる。特に専門書関係に力を入れており、ズラリと並んだ書棚は壮観だ。単なる書店ではなく、神戸の文化基地の一つとなるようにという理念のもとに店内には喫茶室やギャラリーも併設されている。なお、新書や文庫などのコーナーは5月16日よりオープン。

中央区雲井通5－3－1 ☎252－0777

格調の高い店内

★コンベンション都市をめざし、語学教室スタート

財団法人神戸国際交流協会（宮岡寿雄理事長）が主催する語学教室「KIA語学クラブ」が3月からスタートした。国際交流事業の一環として開設されたもので、受講生は国際交流会館で開かれる国際会議を優先的に傍聴できる。

3月6日に行なわれた開講式は、協会関係者の他、在阪神領事団団長、在神留学生など約80人が参加、終始なごやかに行なわれた。現在のクラスは、英語と中国語だけだが、漸次、他の外国語のクラスも増やしてい

なごやかなオープニングパーティ

図書ガイド

居留外国人による神戸スポーツ草創史

棚田 真輔

緑の山に囲まれた神戸においてスポーツが教育や文化活動において果した役割は大きい。また、神戸は各種文化の上陸地であったがスポーツにおいても然りである。

本書はスポーツの個別史として神戸居留の外国人がどのような意図でスポーツ活動をし、どのように日本人に伝わったのかを明らかにしようとした貴重な書物である

（1800円・道和書院）

郷土資料総合目録

兵庫県図書館協会編

情報化時代といわれる今日、情報（資料）の収集、整理、保存、提供に携わる公共図書館の責務はますます重大である。その場合欠かすことのできないのが総合目録の整備であるが、今回ジュンク堂書店が刊行をひきうけることにより陽の目を見た。兵庫県内公共図書館22館の昭和56年1月現在所蔵する郷土資料の総合目録。

（8000円・ジュンク堂書店）

く方針。

★ポートピア1周年記念に なつかしの映画祭

3月22日、国際交流会館において、グレタ・ガルボ映画祭が開催された。これはポートピア1周年記念行事の一環として映画美術館設立準備委員会が主催し、キタノサーカスが企画したもの。プログラムは「肉体と悪魔」「女の秘密」「恋多き女」などで全五篇。会場はオールドファンの姿も多くグレタ・ガルボの艶姿に酔いしれていた。

悩ましいまなざしのグレタ・ガルボ

★世界的シェフが神戸に

リヨンの料理人協会会長でMOFを授与された世界的シェフ、マーク・アリックス氏が来神。5月9日から三宮ターミナルホテル4Fのシャンテ・クレールで見事な腕を披露する。食通には見逃せない話だ。

★ペン画で描く街並み

「嵯峨野から北野へ」

日本で数少ないペン画の新進気鋭の作家、小西恒光さんが、4月1日から8日までラインの館で展覧会を開いた。小西さんは、これまで、日本人の心のふるさと、嵯峨野を描き続けてきたが、今回はサンTVディレクターの村上和子さんの著書「神戸味どころ」でイラストマップを担当した縁で、村上さんのアレンジによって、北野の風景画を描いたものだ。細い線で描いていく独特の画法からは作者の情熱がひしひしと伝わり、見る者に強い感銘をあたえている。

絵をはさんで小西、村上両氏

花時計 夫夏秋冬

日本の文化を輸出する

サントリー文化財団がここ3年間、行ってきたシンポジュウム「日本の主張」JAPAN SPEAKS 82が大阪で開催された。

このシンポジウムは国際的なレベルで実施され先駆的提言を行ってきた今回のシンポジウムは3月12日・13日の両日に亘って行われ七〇〇人の外国人、日本人が参加して熱気溢れる討論が展開された。このシンポジウムで印象に残ったのは李御寧氏（梨花女子大学教授）―『「縮み」志向の日本人』の筆者として知られる―の発言である。李氏は日本文化への造詣が深いが、日本文化の優秀性を説き、日本はもっと「文化交流」に力を注ぐべきことを強調した。

「日本はこれまで、漢字文化や仏教や儒教など、アジアの文化的ルーツを共有していながら、それらをとり入れる努力を行ってきたが、外へ向けて自分のものを教え広める努力は怠ってきた。日本側からの積極的な文化交流の努力が必要である」と説き、日本の中世期の〝阿弥文化〟で形成された日本文化をアジアに輸出するべきであり、アジア諸国の信頼もそうした努力の中から生れることを示唆した。この鋭い指摘に参加者も深い感銘を受けたのである。〈Y〉

KOBE POST

★三月末で、神戸文化ホールの**松井一郎**館長が退官された。四八年の十一月一日の開館間もなくより八年五カ月の間、名館長として神戸フィルハーモニック、神戸室内楽団を創り、五流能、東西寄席、ジャズフェスティバルなど名物となった。後任には**北嶋敏男**副館長が昇格。五月二四日〝名物館長を送る夕べ〟が、生田神社会館大ホールで午後六時半より開かれる。

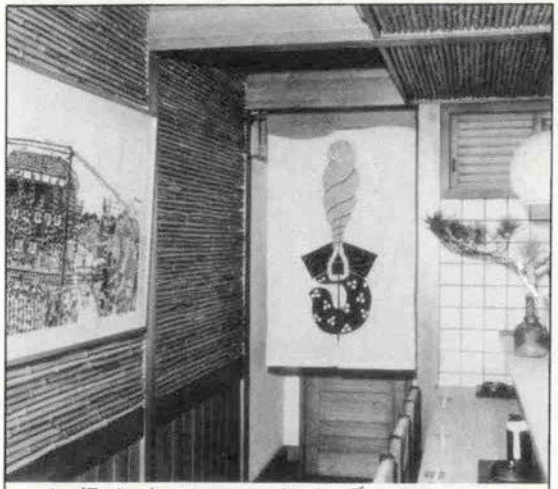
★神戸大学に十五年在職された教育学部の**伊藤隆二**教授が横浜市立大学文理学部教育心理学研究室に転職されました。自宅〒232横浜市南区六ツ川一ノ六七九☎045七一二一三五九二

★神戸フィルハーモニイの指揮者**朝比奈千足**さんが、西独ベルリン放送交響楽団の特別研修者として招待を受け、四月から三カ月ベルリン滞在。五月には東独マグデブルグ、またイエナの各地の交響楽団として客演され、夫人の**加代**さんは東独ハレ・フィルハーモニーと共演します。

★KKコウベブックスで永年おなじみの**村田耕平**さんが円満退社され、四月三日より「三宮ブックス（山勝商事）」を開設されました。神戸市中央区琴緒町五丁目一―二九五号（国鉄三宮駅一階神戸ワシントン内）☎〇七八（二五一）二〇〇九

★羅甸堂人文科学センター・神戸文学学校が新事務所に移転。神戸市中央区下山手通2―13―22福成ビル2F☎332―0900

★日本経済新聞神戸支社報道課の**桝井一之**さんが東京本社事業局産業事業部次長に転任されました。新しい勤務先は〒100東京都千代田区大手町一―九―五☎〇三（二七〇）〇二五一（内線二七九七）



しみじみ味わう
季節の味
日本に生まれて良かった

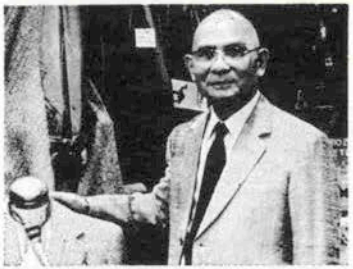
ご主人のなべさんが黙々と包丁をふるう
付き出しの数々。
新鮮な魚と手書き
のおしながきに表わ
れる家庭的な雰囲気
がこの店の特長。
お酒は姫路のヤエガキ
お米は富山のコシヒカリ
棚に並ぶ器は伊万里…
心配りがうれしい味な店。

おでん　季節料理

おたやん

神戸市中央区中山手通1-3 ローズプラザビル1F
TEL (332) 2929 5:00PM～1:00AM　日祝休

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを



三恵洋服店

神戸・元町4丁目 ☎(078) 341—7290

■第6回神戸女流文学賞佳作〈第5回〉

海の柩

菊池佐紀

え・貝原六一

「あの酒井さん、あんまり好きじゃないわ、もう少し年取った人居ないのかしらねえ」

「別に悪い人でもないだろう、笑い上戸なんだよ、役目だけ果して貰えばそれでいいんだから、気にすることないよ」

要は佐知子の人ぎらいがまた始まったと言いたげに目をそらせると、それに俺は、と附け加えた。

「婆さんあんまり好きじゃないんだ、若い人の方がものが言いやすいしね」

聡子さんもお若かったからものが言いやすかったのね。そう言ってやりたくなる。病後、夫の世話もできないで海ばかり見て暮している自分が、要の昔の情事の相手を持ち出してなじれる立場ではないと思い返すと、佐知子は黙っていることにした。ふみ代はお人好しを装っているけれども、不可解な部分をたくさん抱えこんだ女に思えてならなかった。通勤のふみ代は自転車でやって

来た。往復の電車賃はちゃんと支払っているはずだった。チャイムも鳴らさないでいきなり家の中へ上りこんだ。階下で俄かに騒ぞうしい話し声がしはじめる。テレビの放音だと判ると、これで一日中付けっ放しにされるかと気が重い。人の家を何と思っているのかしらと要にぶつくさ言うと、

「別に隣近所があるわけじゃなし、少しぐらい喧しくてもいいのじゃないか」

ふみ代をかばい立てるようにそう言う。ふみ代は当分は挨拶をきちんとやっていた。階段を昇ってきて、ドアの蔭に慎ましく手を付いてものを言ったのに、雇人としては当然の礼儀を平気ではしょるようになったのは、いつか、要の食事の給仕をした時にけたたましい笑い声を立てていたあの晩からだったように佐知子には思える。佐知子に嘘か真実かあまり当てにならない身の上話をたっぷり聞かせたあとでふみ代は少し両肩をすぼませて言った。

「早く帰ったところで誰が待ってくれている訳でもなし、少しくらい遅くなったっていいんですよ」

そうお、とうっかり合槌を打ったのがいけなかった。ふみ代は要の帰りを待って食事の給仕を終えてから、うす暗くなって帰るようになった。要の食事の度に嬌声が階下から佐知子の耳に届いた。要に他意があるとは考えられなかった。ふみ代づれに要の心が動くとは思えない。ふみ代はその場限りの人間だから、挑戦する気で声を立てているわけでもあるまい、と佐知子は自分に言い聞かせたが、胸の底が少しずつ波立ってきて、次第に穏かな顔をして居られなくなる。耳をそばだてていると、姿が見えないだけに妙な妄想が湧いてくる。とうとう寝ていられなくなって起き出すと、下腹の傷に用心しいしい、そろりと階段の手摺りに手を掛けていた。笑い声がまだ続いている。要があんなに楽しそうに声を立てているのを今まで一度も耳にしたことがなかった。とそう思える。ネグリジェのままで佐知子は階段の踏み板の上にしばらく座っていた。男は案外、ああ言った無知で気の張らない女に惹かれるのではないだろうか。ふみ代が腹の中に抱えている傷んでいない子宮が嫉ましい。本気でそう思った。

最初の一カ月がまだこないうちに佐知子はふみ代に暇を出した。

「あんたのからだどうなの？　ひとりになってやってゆけるのかい」

ふみ代さんにもっと、と言いかけて要は佐知子の顔色を読んで止めた。だんだん強気になってゆくふみ代の増長ぶりと不作法にこれ以上つき合いきれないと佐知子は言う積りだった。酒井さんと呼んだら？　いつのまに名前呼ぶようになったのよ。あなたが少し甘やかし過ぎたんじゃないの。程度があるわ。言ってやりたい文句を喉へ貯えこんで強気に構えていたのだが、要はそれ以上なにも言わなかった。肝心なところへくるとするりと体をかわすのが要の持ち前だった。

はじめてふみ代を見た時、ととのったいい顔立をしているのにどうして化粧くらいしないのだろう、と佐知子は折角の器量をぞんざいに扱っているふみ代を訝ったくらいだった。服装の趣味も悪く投げやりなふみ代が近ごろではこってりと、目に立つ化粧をしてやって来る。佐知子が思わず、あ、と目を瞠るほど、化粧したふみ代はきれいになっていた。とてもふみ代づれと低く値踏みする顔ではなくなっている。品のわるい流行歌を誰憚らず唄っているふみ代がチャイムが鳴るといそいそと要を出迎えに出る。時間を見計って化粧崩れもちゃんと直している。ふみ代と要の入り乱れたスリッパの音を聞くたびに佐知子はふみ代に心臓をぎゅっと一掴みされた気になってくる。ふみ代はもっと尻を落着けたそうだったが、おかげさまであたしも良くなったから、長いこと御苦労さま、と佐知子は断った。感情を隠しきれないで切り口上になっているのが自分でも判った。世話になったのには違いないのだからとぐっと押えて、給料の上に余分の

紙幣を上乗せして出すと、ふみ代は目ざとくその数を読んで、ふンと鼻を鳴らすのが判った。それでも型通り挨拶をして、ふみ代は無事に出て行ってくれた。

ふみ代に似た女がうすい肩を張ってそそくさとカウンターの方へ行く。片頬がまだもごもご動いて、唇の端っこを割烹着の裾で一拭いしている。食事のあといつまでも揚子を使ってテレビのメロドラマに熱中していたふみ代を思い出して、佐知子は目を伏せた。女が出て行ったあと、ふみ代でなくて良かったと改めて思った。ふみ代と顔を合せても挨拶に困るだろうと思った。とにかく、冬太郎のところへ電話を入れなければならない。体が椅子から上らなかった。もう少し、と思って坐り続けている。ふみ代が去って、夜になると妙な電話が掛かることがあった。浦木でございます、と言うと、二、三秒の間をおいてがちゃんと切れる。立て続けに二度も同じことが起ると、電話口で息を殺していたのはあのふみ代であったような気がし始めた。とっくの昔に要と切れて嫁に行ったはずの聡子が今時分になって未練を出してくるとも思えない。佐知子の声を聞いて、とっさに息を停め、ひるんだふみ代の顔がどうしても浮かんでしまう。

「いやあねえ、失礼な人もいるものねえ、こちらが名乗ると黙って切ってしまうわよ」

佐知子が口をとがらせると、要はふうんと気のない返事をして茶を飲んでいる。山積みにした学生のレポートに目を通している要の表情が動く気配はなかった。

聡子とのことも佐知子は深追いはしていない。冬太郎と自分との傷あとのみにくさを考えると要の過失を咎め立てする気にはなれないのだ。そのうち聡子と切れたらしい要は浮かぬ顔で大学から早目に帰ってくるようになっていた。女のことを知らないのではなく知っていて泳がせているのだという素振りをそれとなく要には判らせていた。ハンドバックの中の小銭入れをまさぐってみても十円玉は一枚も出てこなかった。それを佐知子は義父へ電話を掛けないための口実にした。自分へのうまい口実でもあった。

暦が三月に変ると二階の窓から見下す海が妙になまめいて感じられた。春が近くなると女と等しなみに海も心が弾んできて色気づくのだろうか、と佐知子は一旦はまじめにそう考えて、今度はらちもないことを考えつくものだと独りで可笑しくなってきた。出張だといって要が朝早くから家を出て行ったあと、佐知子は揺り椅子に腰を落したまま海に向っている。ゆうべから小止みなく降っていた雨足がやっと間遠になってきて、小糠雨ほどのか細さに変っていた。空から黯んだ翳りがふっ切れるとあたりに明るさが和ごみ始めた。丘陵地帯の畑を覆っていた雨霧が空の彼方へ徐々に立ち退いてゆくのが目に捉えられた。海と自分との間に立ち塞った靄が消え去ると今朝の海がどんなになまめいた姿態を晒すだろうとそれが楽しみでもあった。

洒落者の要は出張のために新しく買った柔かな茶皮の鞄に、下着やら雑誌やら詰め込んで慌しく出て行った。要の運転する黒塗りのセドリックが車の両脇に水しぶきを散らして一文字に突っ走って消えて行くと、佐知子は急に気が軽くなった。あと四、五日もこの広い家に独りで取り残される心細さはあったが、要が傍らに居ない方が落着くのかもしれなかった。受けた手術のあと、二つ年下の要との間に性交渉が途絶えてしまってからは、要はずん、と遠くへ遠くへいてしまった。要と一緒に過ごす時間が次第に気詰りなものになってきていた。なにを考えているのか判らないもどかしさが結婚当初から要にはあった。そのもどかしい部分に佐知子が体当りしかけると要は忽ち鎧で身を固めた。ぶつかって、ひらっと体をかわされてみると、気持の持って行き場所がなかった。肩すかしに懲りて佐知子は要にぶつかるのを止めてしまっている。そのままのろのろと歳月が去って逝き、十五年という膨大な時間をしぶしぶ要の傍らで過してきたとも

言える。要という男が隠し持っている生まの、どきどき鼓動を打つ心臓を摑んで自分の掌を血まみれにしてやろうと企んだことも一度や二度は佐知子にもあったが、十五年の月日の間にそれがどんなに望みのないことか思い知らされてみると、佐知子はもうこの年下の夫を諦めていた。要の腕を摑んでねじ伏せることも諦めた代りに、要という男への愛情が身内にふつふつと沸くことも無くなっている。夫婦を取り巻く空気は淡白で涼やかだった。皮膚の中にまで滲透し、ねっとりと絡みついてくる

熱質のものはなかった。冬太郎という男が今も確とした存在感を持って佐知子の中に根を下しているのに、一緒に暮してきたはずの要に実在感がないのはふしぎと言えた。

「けんかしたことがないって、あなたたち、いいわねえ」

要の姉が羨しそうな顔をしたことがある。

「あたしたちって大変なのよ。パパと小ぜり合いのしっ放しなのよ、けんかしない日がないみたい」

口とうらはらに姉は結構楽しそうに目尻を下げている。要は案外、意識して妻との間に一定の間隔を保ってきたのではないかと感ぐれるふしもあった。理由を問い詰めて要から答を引き出す勇気は佐知子にはない。

見知らぬ町へ途中下車して喫茶店で過していた間に、ふくは佐知子の留守の家へひっきりなしに電話をかけていたらしかった。沈んだ気持のまま、所在なく家へ舞い戻ってみると、玄関の沓脱ぎへ靴を脱ぎきるかきらないまに、もう電話のベルが家中に鳴り響いた。しびれを切らしたふくからだという予感が身内にうごめいた。

「奥さま、まあ、いらしたんですか」

と、ふくは電話口で絶句した。怨み言が次から次へと出てきた。

「おいでになるとおっしゃるからお待ちしていましたのに、まあ」

「病人はどうなの」

激昂してくるふくの声をさえぎったが、佐知子はさすがに後めたかった。

「さちこ、サチコってもう大変で。こちらから電話しろってもうさんざん焦れて、十分置きに電話させられるんです。言うことをきかないとこうすると言って頬っぺたぶたれましたよ。人が変ったみたいになって。わたくしもうこわくなって。もしもし、奥さま、聞いていらっしゃるんです？　申し訳ないんですけど、もうわたくしおひまを頂きたいんです、これじゃとても……」

語尾が泣き声にくぐもった。暴力をふるう冬太郎の面

倒は到底見きれない、それに私の方にもよんどころない家庭の事情があるんですと普段は気の好いふくが、白髪混りの小さな髷をふり立てているらしい尖った語音が受話器の奥からせり上ってきた。それに奥さま、雇い人の私の口からこう申してはなんですけどと口籠って、

「いくら実のお父様でなくても、あんまりお冷いのじゃありませんか」

もう少し優しくできないのかと好人物の老女はしまいにはあらわにそう言って佐知子をなじった。明日にでも暇を呉れといきり立つふくをなんとかなだめておいたが、あれからもう二十日近くも経っている。佐知子が約束をすっぽかした一時の気の昂りからふくはそう言ったのかと思ったが様子が違った。三年余りも厄介な老人の世話を親身にし続けたふくのために、給料をもっと増して、行く末のことも考えたいからとそう言ったのだが、ふくは聞かなかった。息子や嫁が帰ってこいと言ってくれる時に素直にそうしないと、行く先独りぼっちになって泣きを見るから、としきりに心細がるのを聞くと、無理もないと思い始めた。一日も早く代りの看病人を付けなければならなかったが、ふくほどの好人物がおいそれと見つかるとも思えない。奥さまのお宅へお引き取りになっては、などとふくは無責任なことを言っている。画廊を共同経営している女友達の千賀子が見舞を兼ねて経営報告に来た時、話のついでに義父のことを持ち出してみた。

「今は国が面倒見てくれる時代なんだから、あんた、個人が無理して突っ張ることないわよ」

千賀子は肥った体をゆすって事もなげに笑うと、

「そうだわ、養護老人ホームへ入れる手もあるわよ。なんとかなるわよ。福祉関係へ聞き合せてあげるわよ。民生委員にも親しい人いるんだから」

調子よく智恵を授けてくれた千賀子の返事を待ち続けていた。冬太郎の始末は一日伸しになっている。

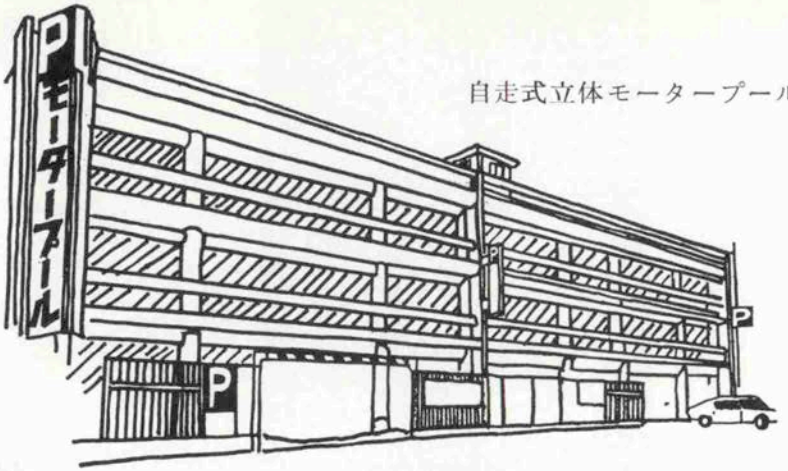
ふくを雇う時、冬太郎は佐知子に預金通帳を二冊見せておいて、一冊を判コごとぽんと投げて寄越した。ふくに渡す二年分くらいの給料の額が記載してあったが、なしくずしにそこからふくに入り用の金を渡していって、それもとっくの昔に底をついている。素人画家が展く個展に画廊を貸して毎月上る収益の半分が佐知子の唯一の収入源なのだが、頼みの綱のその画廊も千賀子の口吻では行き詰った状態にあるらしかった。どこかぞんざいな経営法は気になってはいたが、自分も病気で寝込んでいて、千賀子に任せっ放しにしてきたのだから今更責めるわけにもゆかなかった。

冬太郎が思わせ振りにふところへ隠し込んだ通帳の中身が気にならないことはなかったが、女との贅沢な暮しに財産を蕩尽してしまった冬太郎のことだ、有るふりをしてみてもタカは知れている。幾らなんでも老人の肌付金まで取り上げる気にはなれない。俺の金をさちこが取り上げてしもた、などと憎らしいことを冬太郎はふくに言ったりするらしいが、ことをわけて言って聞かせても呆けた老人が納得するとは考えられない。冬太郎の行く末を要に相談してみても、あの要が本気で考えて力を借してくれるとは思えないし、どうしようもなかった。実の親子じゃありませんからと言って冬太郎を縁切りにするわけにもゆかない気がする。どこにも打開策のない、心細い思いに駈られてくる。

海を凝視めていると何とかいい思案が浮かぶかもしれぬ。毎日海ばかり見て暮せるいいご身分と要は嘲っているが、目の前に展けた視界が展望のない山だと気詰りでますます息が詰ってしまうだろう、佐知子は海の拡がりを眺めてはいつもそう思う。海と対面することで救われているのが要には判らないのだ。

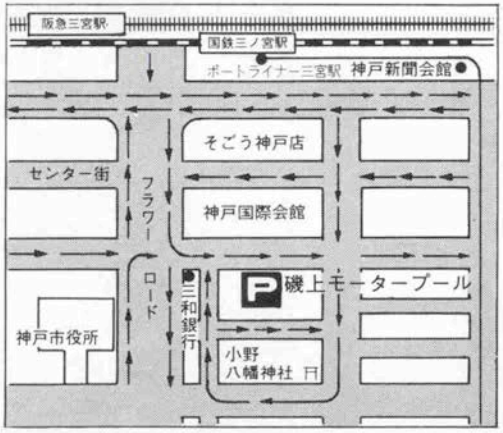
雨の去ったあと、海は紫がかった灰色に煙って地平線もはっきり捉えられない。山の稜線が靄の中にしっとりと沈んで、墨のひと色で濃淡をうまく染め分けた一枚の墨絵に見える。溜息をつかせるほどの清冽な海が今朝は窓外に展けている。

（つづく）



自走式立体モータープール

ビジネスに！
ショッピングに！
ご利用ください



- 収容台数 300台
- 月極駐車可
- 年中無休

(8：00AM～11：00PM)

磁上モータープール（神戸国際会館前） TEL (078)251-7873

■第6回神戸文学賞受賞作品■ 〈第5回〉

ガチャマン

南禅満作

え・小西保文

釣鐘は猛然と蒲団をはねのけると、板廊下に出て裸足で隣室の前に立った。全身怒りに燃えていた。そのうち、寒さを覚え、ズボン下姿であることに気がついた。隣は灯りがついていなかった。物音一つしない。何でもなかったのだった。しかしそれでも疑念を払うことはできず、結局、不機嫌になっただけだった。引返すと、多加はすでに感付いたのか夜具を肩から外して起直っていた。気配で分ったようだ。「どしたん」ときいた。

釣鐘は蒲団をかぶった。「隣で聞いてはったぜ」多加も横になった。「誰に何を聞かれたん」「町会議員さんやがな」

多加は身体を固くした。

「嘘」

「嘘なもんか。いま、何時やと思うとんや。夜中に部屋でほたえているのが町の噂になってみな。顔上げて、道歩けんのやで」

しばらく眠った。よくは眠れなかった。多加が念頭を去らなかった。多加とはこのままではいけない。多加と

話をつけねばならぬと考えた。何度か厠に立った。三度目の折、
「今なら、思い返すことができるのとちがうんか」
と背中に話しかけていた。多加も眠っていなかったらしい。ぴくんと、癇性らしい身震いが背中に伝わった。多加にも思うことがあるらしかった。
「聞いているのかいないのか、相良さん」
「聞いている」暫らく経って答えた。
「考えてみないかね」
「何を考えるん」
返事が遅かった。
「返事、できんのやな」
すると多加は、「考えているのよ」と間髪を入れず今度は口走った。「もう、来てしまったのよ」
多加の声が必要以上に高ぶっているのに気がついた。彼も負けていなかった。
「わしはあんたを裸にしたこともなければ、抱いたこともないのだぜ。分ってるな」
今度は返事がなかった。若い人に、露骨な言葉だと気がついた。言直した。
「惚れた、はれたじゃないのだぜ。熱くなるのは、わしらの年では、身体に火がついてからのことと違うか相良さん」
すると、きっぱり言った。
「気持の問題なのよ」
形でそうでなくとも、気持ではそこまで来ていると言うのだろうか。やはり、蛇がそうさせたのだと気がついた。
人気(ひとけ)がないのに、炊事場のあたりで、洗って、伏せて、重ねておいた茶碗の崩れる音がした。風が出て来たらしかった。
釣鐘は上衣の上に、ジャンパーを重ね着した。車がオート三輪であるのを思い出し、ズボンは毛のをはいた。仕度ができると、多加をほっとけないのに気が付いた。
「出掛ける」
と彼女の枕許へ屈みこんだ。多加は目をあけている。
「帰るのは何時か分らん。あんたはどうする」
多加は掛蒲団の端を両手でつかんでいる。返事がないのは、分別がつかないからだろう。もっと説明が、彼女には必要だったに違いない。それを話さなかった。彼は急にいじらしくなり、髪に触れようと手を伸ばした。多加は気むつかしく、眉をしかめて拒んだ。
「そならな」
部屋の外に出た。まだ夜が明けていない。町会議員の前の廊下を歩いた。その次の部屋に甥が寝ている。甥には今日の計画を打明けていた。障子を開けると、寝息が聞こえる。若者の男臭い匂いが暗い部屋に立ちこめていた。一人で出掛けるのだから、甥は寝させておくことにする。
車は工場の通路に入れてあった。灯りをつけて近付くと、生地が荷台で匂った。合羽を物置から運んで、半長靴の足でボデーに上る。畳んだ合羽は運び易いが、折目をのばすと何処までもひろがって、摑みどころがない。皺が荷の上でできる。その皺を四隅へのばしていると、多加が起きてきた。寝たままの姿で、ズボンのすねの裏側に皺があるのが、妙に投げやりに見えた。足がもつれている。
「どこへ出掛けるん」
ぽつりと聞いた。瞼が腫れぼったかった。昨夜のことが尾を引いているのが分った。黙っていると、合羽の端を不遠慮にボデーから持上げてのぞいた。
「製品じゃん」
彼は黙っておれないことに気がついた。
「うちの従業員には、話しなや」
多加はそれで感付いたらしかった。いやいやをした。いやいやは、冗談かと初め思った。冗談でなかった。首を振りながら後退りしている。彼が手を振上るのを警戒

しているのだった。
「警察に引っかかるじゃん」
「そんなことをいちいち心配してたら、この商売は出来やしないのやで相良さん」
「そやかて臭い飯食べんならんのと違うん」
彼女は、心配してくれているのだと分ったが、有難くなかった。昨夜は彼女が誘ったのだった。拒んだのは自分である。誘った、拒んだ、何れにしろ、結果は同じだった。他人で終ったのだった。他人が人のすることに口出しできようか。
「臭い飯なら、もうとうから食べて来とるがな」
彼女は顔をしかめた。
「昔のことじゃん」
「三宮で生地屋をやっていたときやがな」
「すんだことじゃん」
「すんだことでもして来たことは、して来たことやがな。市電でストして、電車を止めたことかてあるのやで。別に自慢にならんけど、昔のストは今の山添さんがやっているみたいな、ちょろくさいものじゃない。ブタ箱へはいらんならんのやで」
釣鐘はハンドルを両手で確保し、跨ったサドルの上から足に力を入れてエンジンをかけた。
「ええことやれへんで。金儲けやがな。あんたは止める気か」
「止める」といって彼女は笑った。車は後ろ向きになっていた。工場の戸が閉っているのに気がついた。降りて鉄扉を開けて戻ってくると、エンジンが止まっていた。彼は多加の顔を見た。いたずらかと思った。いたずらでなかった。
「どこに触ったのや」
と咎め、多加が目をしかめ、いやいやをしているのを見た。彼は運転台を下りた。多加は後ずさっている。
「何で急にそんな気になったのや」
「そやかて、後引く。うちが今夜来て、こんなことする気になってしもうたんと違うん」
それで納得できた。車の荷造りをしたのは、彼女の来るまでのことだった。それを、来てからのことと混同しているのだと思った。
「関係ないこととちがうか」
多加は地たんだを踏んでいる。
「社長はんが止めんのやったら、これから行って興津さんを呼んでくる」
釣鐘は荒っぽい声を出していた。多加は両手で耳に栓をした。
「ほんまに呼びに行く」多加は後ずさった。追い詰めるとさらに後ずさり、それからいやいやをし、顔をしかめ、耳に栓をしたまま、工場を出て行った。
釣鐘は、多加を追って道へ出た。猫が彼女の駈けていった方角で、屋根から塀の狭間に飛下りた。姿は見えなかったが、ギャッと人間のような驚声を出している。
彼は暗い道の真中に立った。面倒なことになる。多加が興津を連れてくると思った。多加は「後を引く」と言った。それは分らないことはない。しかしそれを好意と彼女が考えているなら、余計なお節介だと思った。早やとちりではないか。とんでもないことをする女だと思った。一緒に暮らせる女でないと思った。
いつか無人の工場で、多加のロッカーから作業衣を取出して、襟を嗅いだことがある。襟垢がついていなかった。乾いて、生地がさらさらしていた。心持よかった。彼のは洗濯しても、襟に垢がこびりついて、湿っぽかった。タオルもそうだ。
多加のは白くて清潔だった。彼は黄色かった。多加に女らしさを覚えたのはその時からである。
多加とは、終りが来たと思った。

オート三輪を道に出し、工場の鉄扉を外から閉めた。後は出かけるだけになった。雲間から月があらわれた。下駄音が町角に聞こえ、その落付いた足取りで、遠くか

らでも興津だと分った。興津は引止めるだろうか。
釣鐘はいったん跨ったサドルから降りて、ひともめしなければと覚悟を決めた。
「どうしたのです。真夜中に」
車の手前から、立ちどまらないで興津は話しかけてきた。多加を従えていた。彼は答える前に、けわしい視線を彼女へ向けた。
「気狂いみたいに怒って、ききはらんのよ」多加が興津に告げ口した。
興津は笑った。釣鐘は笑わなかった。
「もめているのですね」
「ほっとけなかったのよ」
「まあまあ、釣鐘さんにも事情があるのでしょうから」
興津がいった。それから車の後ろへ回って、合羽の下のボデーを覗いた。見届けると、運転台へ引返した。
「これを何処へ持って行こうというんです」
「大阪の問屋街と思うのよ」
釣鐘が答えないでいると、多加が又告げ口した。興津は頷いた。何べんも頷いていた。
「船場の井池ですか」けわしくはなかった。何時もののんびりした興津の口調だった。「釣鐘さんはいつか、わたしにそんなことを話していましたね。いや、直接じゃなかったかな。あなたの甥御さんだったかな。聞いたのは。忘れた。やるのですか」
それを面白がっているように笑った。
「やります」と釣鐘はきっぱり言っておくことにした。
「なるほど」
「とめないで下さい、興津さん」
今度は、あいまいな笑い方をした。「ここは、千五百軒からの、繊維の卸し売業者がいるのだそうですね。知合がありますか」
「顔がきく処があります。わたしがたずねていっても、どこの馬の骨かなんて、あしらいは受けないつもりです」といって、問屋の名前をあげた。「興津さんもご存知の

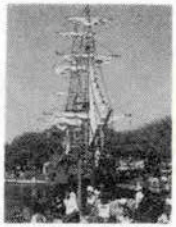
生地屋です」
興津は素知らぬ顔をした。聞いていなかったのか知れない。鶏が鳴いていた。
「一番鶏ですね」興津がいった。
「聞き洩らしました」
「そうですか。あれは、ちゃぼです。ちゃぼが一番早く目をさます。農家で飼っているらしいのです」と言ってから、「しかし、釣鐘さん、これだけの品物を動かすのですからね。無謀じゃないでしょうか。もし途中でMPにでも挙げられることがあっては、取上げられますよ」
興津は笑った。満更の脅しでもなかった。彼もそれは気になっていた。気になっていたから、やってみたかったのだった。人なら、気になればやめる。自分はそうでない。気になって仕方なくなったら、何が何でもやってみる。
「興津さん、これまでは小さなヤミをやってきました」釣鐘はいった。それから、広言は慎しまなければ馬鹿にされると気付いて、話半ばでやめた。すると興津は後を引取って笑った。
「なるほど。大きくやってもヤミ。小さくてもヤミ。ヤミに代りはないというのですね。その気持は分ります」
「口幅ったいことと思われるでしょうが」
「しかし処罰はどうでしょう。罰金は、大きなことをすれば大きく、小さければ小さくてすみますね」
それから東の空を振返って、
「これから、出発しますか」ときいた。雲は、まだ東雲色でなかった。暗かった。部厚い雲の層が、途切れたり、破れたり、している。「夜の方が、検問を巻き易いと思うのですが、どうでしょうか」
興津はそれに答えないで頷いたが、気のない頷き方だった。他のことに気をとられているらしかった。素肌に丹前だ。寒かった。足踏みをしている。唇が白くなっているのが、夜目にもうかがえた。部厚い唇が震えている。早く帰って、一眠りしたいといった気配を見ていると、捕まえどころのない興津の老獪振りがうかがえた。
「これ以上、とめません」やがて説得をあきらめたのだろう。きっぱり言った。「あるいは、これもチャンスか知れませんね、釣鐘さん。うまくいけばの話ですが。しかし運なんて、どこに転がっているか分ったものじゃありません。やって、やり甲斐のあることかも分りませんね」
それから、話がそうと決ったことにあくまで不服顔の多加に、
「女々しい。やめなさい」とたしなめた。「男のすることに、女が口出しするものじゃありません」
多加は頑固にうつむいていた。いやいやをした。
「早く帰って寝なさい」
「うちが出しゃばったん」と不満そうにきいた。興津はおだやかに笑っている。「だって、うちがさせたようなものなのよ」
興津は聞き咎めた。「どうして」
「途中が危ないのでしょう」
「リスクです」
「うまくいくん」
「成功の保証はできませんね」
「だからよ」と彼女は身をもんだ。「どうしてもってなら、うちも一緒に行く。うちもブタ箱へはいればいいのよ」興津はびっくりして多加を見つめ、やがて仕方無さそうに笑った。
「後、引くのよ」
「それはどうして」
「うちがその場にいて、こんなことになったのよ」
「しかしね相良さん、たとえ危なくともですよ。釣鐘さんは覚悟の上です。そうさせて上げなさい」
（つづく）

★神戸っ子トラベルコーナー

★アテネミコノス島とシンガポール8日間
出発日／5月5、12、19、26日、6月2、9、16、23、30日、7月7、14日
費用／¥288,000
OP／ハーバークルーズとラッフルズホテルディナーショー（夕食付）、シンガポールの夜景とディスコツアー（夕食付）
大阪→アテネ→ミコノス→アテネ→シンガポール→大阪
お問合せ・お申込みは**日本旅行**（三ノ宮駅旅行センター内）
☎221－3446

★ハワイ6日間
出発日／6月15日～7月15日毎日
費用／¥158,000
ホテル、市内観光付、大阪発着
OP／ハワイ島1日観光、カウアイ島1日観光、マウイ島1日観光
ハワイアンディナーショー、ポリネシア文化センターとオアフ島1周観光、サンセット遊覧、サンシャインビーチとルアウショー
お問合せ・お申込みは**大丸トラベルサロン**（大丸神戸店6F）
☎331－8121　担当／大畑

★ビッグアメリカ西海岸スペシャル8日間
出発日／6月15、19日
費用／¥169,000
ホテル、市内観光付


ディズニーランド

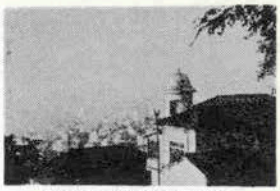
お問合せ・お申込みは**近畿日本ツーリスト神戸営業所**（交通センタービル6F）☎391－4891

★香港ブランドフェア
一流ブランド製品を一堂に集めて免税価格でショッピング。品物は完全保証。
出発日／6月18日～7月31日の毎週金・土曜日
費用／3日間¥69,000
4日間¥79,000
ホテル、市内観光付、大阪発着
お問合せ・お申込みは**トップナッチ**☎242－2695

香港でショッピング

★エック初夏の旅
1、新緑の立山・黒部アルペンルート2泊3日
出発日／6月1～28日
費用／おとな／¥35,500
こども／¥21,500
2、能登半島一周2泊3日
出発日／5月6～31日
6月1～28日
費用／おとな／¥23,700
こども／¥15,000
3、伊豆半島1泊2日
出発日／5月8、11、14、16～31日、6月1、3～29日
費用／おとな／¥34,000
こども／¥21,600
4、ブルートレインと平戸・九十九島めぐり2泊3日
出発日／6月1～28日
費用／おとな／¥34,000
こども／¥21,600
5、おけさの島・佐渡2泊3日
出発日／5月8～31日
6月1～25日
費用／おとな／¥35,100
こども／¥21,200
お問合せ・お申込みは**三ノ宮駅旅行センター**☎221－4500、0190

talk and talk


＜神戸っ子愛読者サロン＞

★春めいてまいりました。神戸っ子NO.251読ませていただきました。"92国際親善パーティ50か国が集う"神戸ならではの集いいつも世界が平和であるように祈ります。"エトランゼの輪郭"中西先生の"生活の匂いがぷんぷん漂う人間像"といわれていることに同感です。生活の匂いは平和があることですから……。季節柄、ご自愛くださいませ。

＜宝塚／丸本明子＞

★私たちは今パラナシ（ベナレス）にいます。ガンジスの沐浴風景や死者を燃してはて灰をガンジス河に流して葬るバーニング・ガードでよく知られる古い聖地です。私たちは当分（1～2年）ここに滞在することになりそうです。BHU（パナラシ・ヒンドゥ大学）というアジア一大きな（面積の）大学に入ることにしたからです。というのも、インドはふつうの旅行者ビザではせいぜい3～6か月しか滞在が許されず、それ以上長期にわたって旅行して回るには、外国に出たり入ったりしなければならない規則があり、ややこしいのでこの際学生ビザをもらってしまうが早いということになったのです。しかしその手続きがまた大変めんどうなもので、しかもインド的に手間ひま要し、何とも委領を得ず途中で何度もくじけそうになりながら数日前にやっと学生ビザが下りたところです。

今は広い大学構内にある某教授の大きな家の2階に下宿しています。食事などすべて込みで900ルピー（2万円少し）、私たちとちょうど同じ頃、アメリカからもう一人まだ若い女性が隣りに下宿を始めましたが彼女はインド哲学が専門、アメリカではサンスクリットや東洋思想の先生をしていたという人で、夜はベランダで星を眺めながらインド・ラム酒をチビリ分けてもらってなめつつ、いろいろ話を聞いております。ホコリっぽく過密な町中とはうって変わり、大学内は静かで清潔で安全、水や電気にも不自由ない、インドとも思えないような好環境、毎食毎食、神戸のデリーやゲイロードに食事しに行っているようなインディアンフードにありついています。インドの家庭料理、特にヴェジタリアンの料理はヴァラエティにとみ、おいしいので驚いています。町のコンサートに行ったり、大学にある美術館やお寺に散歩がてら出かけたり、近くの日本人学生の下宿をおそって本を借りてきたりといったのんびりとした生活です。時に、お酒や神戸の町の夜、文字や映画、マージャン、ぎょうざやおすしやおさしみを恋しく思います。インドでもインフレが激しくついこの間、鉄道運賃が何%だか値上りするという記事を新聞で見たと思ったら、4月からはアルコール類がまたいっせい値上げとかでまるで日本と同じです。

＜インド／中川久代＞